

# ディスガイズの第4モード？

——*The Importance of Being Earnest* における  
Bunburying について——

細 川 眞

## 1

19世紀末の劇作家 Oscar Wilde (1854–1900) による4編の風習喜劇 (Comedy of Manners) のうち、その掉尾を飾る *The Importance of Being Earnest* (1895年初演) では、William Shakespeare (1564–1616) の劇作品に頻出するディスガイズ・モチーフが劇のアクションの中心となっている。劇の中心人物の一人であるロンドン在住貴族 Algernon Moncrieff は、いつでも好きなときに田舎へ行けるようにと、田舎に架空の「バンブリー (Bunbury) と言う名の万年病人」(326) の友人を創ってあるが、彼の友人の Hertfordshire、Woolton 在住貴族の Jack (John) Worthing は、逆に、ロンドンに上京する口実として、Ernest という「よく問題を起こす」(326) 弟を創ってあって、ロンドンでは自分がその Ernest に成り済ましているのである。

Algernon は、そうしたディスガイズをとっている Jack を自分と同様 “Bunburyist” (326)<sup>1</sup> と呼ぶが、この研究ノートでは、特にこの劇の中心人物である Jack / Ernest のディスガイズ、“Bunburying” (338) に焦点をあてて、このディスガイズが、シェイクスピアにおいて見ることができたような自己表象のシンボルとなることが可能かどうか、又、そうならばシェイクスピアの三つのディスガイズ・モードとどのような関連をもつのか<sup>2</sup>、更にワイルド美学での位置付けなど、その問題点を探って見たい。

## 2

自己表象という観点からシェイクスピアにおけるディスガイズを概観したとき、文芸思潮の変遷と共に、16世紀から近代に至るまでの認識論の推移に呼応するかのよう、そこには三つのディスガイズ・モードが確認された。

イギリス・ルネサンスのアイデアリズムの時代、「記号が世界・物の一部」である形而上の本質主義の時代には、人間の可変性、演劇性を逆説的に人間の不変の特質と考え、本質的で多様な統一体という人間観が支配的であった (Davis 40)。手相というアピランス、身体の外徴 (signatures) が運命、性格というリアリティを示すと考えられた

この時代においては、変装は、虚構ではなく、今一つの真のアイデンティティとも見なされた。Aのアイデンティティが、Bのそれに変わるというディスガイズ・モチーフは、それ故、A+Bの複合的統一体としての「自己」を生んだのである。*The Merchant of Venice* (1596-97)のPortiaや*As You Like It* (1599-1600)のRosalindは、本来の女性性と男装によって得られた男性性が調和した理想的両性具有像となった。

Jonathan Dollimoreは、*Radical Tragedy* (1984)の中で、17世紀初期は、16世紀の形而上的本質主義と18世紀啓蒙主義時代に現れる本質論的ヒューマニズムの間にはさまれた、反本質主義の時代だと見なした。神の摂理主義が懐疑的に崩壊し、「宇宙や社会がヒエラルキーと相互依存の形而上的原理で機能するという古い観念は取り替えられつつあった」(158)。人間は脱中心化され、主体性は、社会的に決定されると見なされ、「地球を中心とした宇宙論と、それに対応する中心化構造のイデオロギーに依存していた」(158)。17世紀以前の魂が神に由来する個人のアイデンティティ観は、社会的、地理的流動性と結びついたそれにとって代わられることになる。この新しいアイデンティティ観によると、アイデンティティ自体はフィクション、構築されたものとなる。

AがBになるというディスガイズ・モチーフは、それ故、見方を変えれば、「人のアイデンティティは本質的、根源的に存在しない」(Davis 4)ことをも示唆することになる。AもBも虚構とされるのである。こうしたディスガイズ観は、シェイクスピアでは、四大悲劇に反映されている。*Hamlet* (1600-01)の王子は、狂人のディスガイズを宣言するものの、どの時点が真のハムレットなのか演技する彼なのかわからない程、多様な自己を見せる。ムーア人の将軍を破滅に導くIagoも、「I am not what I am」(俺はあるがままの自分ではない)(*Othello* 1. 1. 66)とヘビに由来する騙しのディスガイズを示唆するが、本当のイアーゴはどういう自己なのか、最後までわからない。

シェイクスピアの晩年のロマンス劇では、ディスガイズの様相が一変する。変装が透けて見えるようになり、そこでは、新たなアイデンティティ、Bは虚構そのものとなり、本来のアイデンティティ、Aの本質性が強調されることになる。*Cymbeline* (1609-10)で男装するImogenは、かつての男装するヒロインと違って、男性性が全く身に付かず、中の本来の女性性が一貫して透けて見えて強調されている。*The Winter's Tale* (1610-11)で最後に彫像から生き返るHermioneは、一見宗教的奇跡の復活を思わせるが、事実上、彫像に偽装していた「観客だまし」(surprise)のディスガイズをとっていたにすぎない。彼女は最初から最後まで、自分の不義を疑う夫に対して、自己の無実を主張し続ける理知的で主体性をもった一人の自律した女性だった。その彼女の不変の姿は、ドリモアが、18世紀に始まると言った、デカルト的な「本質論的ヒューマニズムによって措定された、自律的で統一された自己発生的主体」の先駆けとなっている(*Radical* 155)。1980年代になって、新歴史主義、文化唯物論等のポスト・モダニズム批評によって、このデカルト的本質論が大々的に批判されてきたのは周知の通りであるが、シェイクスピアは、晩年劇でディスガイズを、人は何に変わろうともその本質は不変であることを示すために使ったのである。AがBになるディスガイズは、ここにおいて、Aは

本質だが、Bは虚構という第3モードを展開する。

### 3

ところで、*The Importance of Being Earnest* において、Bunburyist である Jack Worthing は、既述したようにロンドンで Ernest という虚構の弟に偽装するが、劇は喜劇的にこの虚構が最終的に真実になるように展開していくのである。しかも、本来のアイデンティティが実は虚構となっていて、偽装で虚構としてとったアイデンティティが最終的に真のアイデンティティとなるのだ。このバンブリー主義者であることをディスガイズとみれば、それは、シェイクスピアにはなかったディスガイズの新たなモードを表していると考えられないか。Aが虚でBが本質という第4モードである。

簡単にその経緯を追ってみよう。Jack / Ernest は Algernon Moncrieff のいとこ Gwendolen を愛していて結婚を申し込んだところ、求愛に応じた Gwendolen は、"my ideal has always been to love some one of the name of Ernest." (330) と言う。彼女は Jack というアイデンティティは嫌いで、"The only really safe name is Ernest" (330) と Ernest の名前に拘るのである。真の名前が Ernest ではない Jack は心配になって、田舎で彼が後見人となっている Cecily Cardew が架空の弟 Ernest に関心をもっていることもあって、パリで病死したことにして、自分が Ernest として洗礼を受けて名前を変えようとするが、Cecily に興味を覚えたバンブリー主義者 Algernon が、Jack の弟 Ernest になりすまし、先回りして田舎の Cecily を訪ね彼女に求愛することになる。Cecily は求愛に応じた。

Jack / Ernest に関し、この虚構が真実になっていく過程は、三段階準備されていて、その周到さにも、Wilde がこのモチーフに何か秘めた意味を持たそうとしていることは明白だが、先ずその第1段階が、全くの架空であった弟 Ernest のこの出現である（贋であるにせよ）。そして、Gwendolen も田舎まで Ernest (Jack) を追いかけてきたため、二人の娘の Ernest は入り交じり、劇は喜劇的三角関係で紛糾するが、やがてそれぞれの Ernest の真のアイデンティティが暴露され、Ernest という人物は実在しなかったことが判明する。しかし、劇は、ロンドンから家出した娘 Gwendolen を追ってきた Blacknell 夫人が Cecily の家庭教師の名前が Prism だと聞いた時から意外な方向に展開していく。

Prism 嬢は、もと Blacknell 家で働いていて、夫人の妹 Moncrieff 夫人の、行方不明となっていた赤ん坊を間違えてトランクに入れ、Victoria 駅 Brighton 線の手荷物一時預かり所に預けていたことが判明する。これを聞いた Jack は、二階にトランクを取りに突進するが、実は Jack Worthing という彼の名はもともと真のアイデンティティを示すものでなく、彼は Cecily の祖父 Thomas Cardew 氏によって、間違えて Cardew 氏に一時預かり所で渡されたトランクの中で発見され、養子にされたのだった。発見されたとき、Cardew 氏が Worthing 行きの切符を持っていたので、彼は Jack Worthing と名づ

けられていたのである。彼の子供時代からの真実と思われたアイデンティティは実は最初から虚構だったのだ。これを、ディスガイズ・パターンで言い換えれば、先ず本質だと思われたディスガイズのアイデンティティ A (Jack Worthing) は虚であった。

このトランクの一致で、Jack の出自が明らかになるが、彼は、単に Blacknell 夫人の甥というだけでなく、そのアイデンティティは Algernon の兄のそれでもあるということの意味する。これが虚から実への第2段階となり、Algernon は Bunburyist となって Jack の弟 Ernest に偽装していたものの、弟であるのは真実だったのである。

では Jack の実際の洗礼名は何だったのだろうか。長男だったので父の名を取ったのが (382)、誰も覚えていない。父が死んだとき Algernon は一歳だった。そこで父は軍人だったことから軍人名簿を繰ると、そこには Ernest John Moncrieff と記載されていた (382)。Jack は彼がロンドンで偽装していた Ernest そのものだったのである。このように、この劇の Bunburying においては、変装の虚のアイデンティティ B が、リアリティ、本質だった、というどんでん返しが起こる。

勿論、これはアイデンティティを巡っての喜劇なので、A のアイデンティティの時の Jack と、B のその時の彼 (Ernest) に人間的な多面性が反映されていたり、人格の変容があるわけでもない。シェイクスピアのディスガイズの場合には、そこに「自己」観、人間観が示されていた。Wilde のそれは、そうした認識論とは無関係だろうか。

#### 4

ところで、Oscar Wilde は、*The Soul of Man Under Socialism* (1891) の中で、"The only thing that one really knows about human nature is that it changes" (1100) と、人間の変容性、多様性の特質を指摘している。そして、彼は、"Unselfishness" であることは、人の "infinite variety of type" を認めることであり、"asking others to live as one wishes to live" (人に画一性を求めること) が "Selfishness" であると言う (1101)。このことを彼は、*The Picture of Dorian Gray* (1890) で、

He (i. e. Dorian Gray) used to wonder at the shallow psychology of those who conceive the Ego in man as a thing simple, permanent, reliable, and of one essence. To him, man was a being with myriad lives and myriad sensations, a complex multiform creature that bore within itself strange legacies of thought and passion... (112)

と、人間の永続的な本質性を認めず、多様性がその特質だとする人間観をその主人公にもたせることによって、一層際立たせている。

Wilde は、更に *De Profundis* (1905 年出版) で、"Art has made us myriad-minded" (926) と言い、例えば、"The Japanese people" というアイデンティティは、北斎などの「個性的な芸術家」の "self-conscious creation" (*Decay* 988) であり、"an exquisite fancy of

art" (Decay 988)、すなわち虚構だと言うのである。

こうした Wilde の虚構としての人間観は、当然ポスト・モダニズムにおける主体性のない構築物としての人間観を思い出させるが、果たせるかな、文化唯物主義者の Jonathan Dollimore は、*Sexual Dissidence: Augustine to Wilde, Freud to Foucault* (Oxford UP, 1991) で本質主義者の André Gide と対比して反本質主義者としての Wilde 像を指摘している。彼によれば、Wilde の立場は "anti-humanist" のそれであって、彼の「個人」概念は、デカルト的リベラル・ヒューマニストの "that sense of the concept which signifies the private, experientially self-sufficient, autonomous but ultimately quietist, bourgeois subject" (9) と明らかに異なっている。

以上のような Wilde の人間観、「自己」観から、一方で彼は、人間・「自己」の多様性、流動性、構築性を指摘した Montaigne の後継者とされている。Montaigne は、"man is a wonderfull, vaine, divers, and wavering subject" (*Essays* i. 19) であり、

There is nothing I so hardly beleieve to be in man, as constancie, and nothing so easie to be found in him, as inconstancy. (ii. 8)

と、人間におけるその本質性、不変性のなさを強調した。彼は人間について、"All is but changing, motion, and inconstancy" (ii. 9) と断言する。

この Montaigne の人間観もポスト・モダニストのそれを類推させるが、John Lee は、*Shakespeare's Hamlet and the Controversies of Self* (Oxford UP, 2000) で、Montaigne における人間観では、"man" は、Francis Barker, Catherine Belsey 等のポスト構造主義者たちが言うように "construct" だが、彼、彼女らが言うような "constructed product" ではない、むしろ "constructor" であり、自己の周囲にあるものを知覚しての "producer of himself" であると、そこに主体性を認めている (174)。Lee の立場は、Alan Sinfield などと同様に文化唯物主義の第二世代のそれであって、人間は言説、イデオロギーの産物ではなく、そこに意識の連続、主体性があるとみる。Lee は、こうした "a self-constituting sense of self" (2) は、プラトン以来の西洋の「自己」観に連綿と継承されていたと言う (84)。そして Lee は、Montaigne 的人物とは、"a continually changing product of self-exploration" (144), "the product of actions in progress" (143) だと措定し、その「自己」に、"the constructed nature of identity", "the variability of this constructed identity" (144), "self-exploration" (デカルト的 "self-mastery" でなく) (202), "processional nature" (143) の特徴を見て、それは Hamlet のものでもあるし、William Hazlit を経て Wilde に至っていると言う。Wilde は、今やポスト・モダニストの先駆者だ。

Lee が指摘する「自己」は、自ら産む主体性はあるものの、その存在は本質的なものではない。それにはデカルトの「自己」のような永続性、確固たる本質性はない。Wilde には、本当にデカルト的本質論的人間観、「自己」観は全くないのだろうか。

Wilde は前述したように「日本人」というアイデンティティは、創造物 (creation) と言ったが、彼は、現実の日本人というものも考えていて、"The actual people who live in Japan are not unlike the general run of English people" (*Decay* 988) と言い、人類に共通な人間の普遍性をも指摘しているのだ。彼は、"we are all of us made out of the same stuff" (975) と、その"dreadful universal thing called human nature" (975) を嫌悪しながらも、万人共通の人間性を *The Decay of Lying* (1891) で認めているのである。

Bunburying というディスガイズで見ることができたパターン——A は虚で、B は本質というパターンは、上述の、プロテュース性と普遍性という Wilde の矛盾する人間観とどのように関係するのだろうか。

Wilde は、*The Picture of Dorian Gray* で Henry 卿に、"The aim of life is self-development. To realise one's nature perfectly--that is what each of us is here for" (29) と、人間における自己発展と、人間性の完全なる成就を人生の目的として主張させているが、Wilde は *The Critic as Artist* (1891) でも人々の「共通の本性」とその完全性に言及している。そして、人間がその秘められた完全性を成就するのは芸術 (虚構) を通してであると言う。

...it is the function of Literature to create, from the rough material of actual existence, a new world that will be more marvellous, more enduring, and more true than the world that common eyes look upon, and *through which common natures seek to realise their perfection.* (1026、イタリックスは筆者)

Wilde には、人口に膾炙している "Life imitates art" (*Decay* 982) というパラドックスがある。この Wilde 美学は、上の人間観と密接であろうが、Jack / Ernest のディスガイズにも関連していようか。

イギリス・ルネサンス時代のヒューマニスト教育者たちについて、Kent Cartwright は、'Humanist educators... could contemplate a human "essence", but one that is inchoate, corruptible or improveable, requiring a kind of performance to be fully realized' (10) と、彼らは遂行を通して成就される潜在性、可能性としての人間の本質性を考えていたと言う。そして、彼は、その実例がヒューマニスト演劇における変装を通じた人の成長、発展パターンに反映されていると見る。

*The Importance of Being Earnest* での、Jack / Ernest のディスガイズは、こうした成長モチーフはないものの、究極的に、虚構を通して潜在的本質を成就するディスガイズを象徴していると考えられるかもしれない。変化には、発展の含蓄があるかもしれない。

注

- (1) 以下、Wilde からの引用はすべてこの版により、括弧内にページ数で示す。
- (2) 以下、シェイクスピアのディスガイズの三つのモードについては、細川第一部第二章参照。

引用文献

- Cartwright, Kent. *Theatre and Humanism: English Drama in the Sixteenth Century*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Davis, Lloyd. *Guise and Disguise: Rhetoric and Characterization in the English Renaissance*. Toronto: U of Toronto P, 1993.
- Dollimore, Jonathan. *Radical Tragedy: Religion, Ideology and Power in the Drama of Shakespeare and His Contemporaries*. 1984. Brixton: The Harvester Press, 1986.
- \_\_\_\_\_. *Sexual Dissidence: Augustine to Wilde, Freud to Foucault*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Lee, John. *Shakespeare's Hamlet and the Controversies of Self*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Montaigne, Michael. *Montaigne's Essays*, trans. John Florio, 3vols. 1910. London: J. M. Dent & Sons, 1965.
- Shakespeare, William. *Othello*. Ed. Norman Sanders. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- 細川眞『虚と実の狭間で—シェイクスピアのディスガイズの系譜—』英宝社 2003.
- Wilde, Oscar. *The Critic as Artist. The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. J. B. Foreman. Vyvyan Holland. New York: HarperPerennial, 1989.
- \_\_\_\_\_. *The Decay of Lying. The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. J. B. Foreman. Vyvyan Holland. New York: HarperPerennial, 1989.
- \_\_\_\_\_. *The Importance of Being Earnest. The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. J. B. Foreman. Vyvyan Holland. New York: HarperPerennial, 1989.
- \_\_\_\_\_. *The Picture of Dorian Gray. The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. J. B. Foreman. Vyvyan Holland. New York: HarperPerennial, 1989.
- \_\_\_\_\_. *De Profundis. The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. J. B. Foreman. Vyvyan Holland. New York: HarperPerennial, 1989.
- \_\_\_\_\_. *The Soul of Man Under Socialism. The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. J. B. Foreman. Vyvyan Holland. New York: HarperPerennial, 1989.